

教科等研究会（中学校道德部会）

平成29年度 研究活動のまとめ

1 研究テーマ

分かる ひろがる 深まる 道德教育のあり方
～特別の教科道德の実施に向けて～

2 研究経過

第1回			第2回			第3回			第4回		
期日	人数	場所	期日	場所	内容	期日	場所	授業者	期日	場所	内容
5/30	7人	御船中	7/25	御船中	研修会	11/30	御船中	岩野靖教諭	2/2	御船中	まとめ

3 研究の概要

(1) 研究の内容

本年度の上益城郡教科等研究会全体テーマ『児童生徒一人ひとりが輝く「分かる・できる」「楽しい」授業づくり』を受け、本部会では、道德の時間において生徒が「分かる・できる」授業とはどのようなものかを検討した。討議の中で、これからの道德教育では、道德的な事柄を単に「分かる」だけでは不十分で、その道德的知識を実生活に「ひろげ」、自己の課題を発見して主体的・協動的に探求して解決する中で、学びの成果を具体的な道德的実践へと発展していく「深まり」が求められるのではないかという結論に至り、本部会の研究テーマを「分かる ひろがる 深まる 道德教育のあり方」に設定した。

また、サブテーマを～特別の教科道德の実施に向けて～とし、平成31年度から完全実施される特別の教科道德を念頭に置きながら研究を進めた。

① 教師の実践力を磨く研修

夏季休業中の研修では、熊本市立白川中学校の桃崎剛寿校長より、『『考え議論する道德』について』と題して講演していただいた。「考え議論する道德」とは、多様な価値観の、時には対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道德としての問題を考え続ける姿こそ道德教育で養うべき基本的資質であるという認識に立つことが重要であり、発達段階に応じて、答えが一つではない道德的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題として捉え、向き合う「道德」であるということを教えていただいた。

その上で、「主体的・対話的で深い学び」と道德について、「主体的な学び」の視点からは、児童生徒が問題意識を持ち、自己を見つめ、道德的価値を自分自身との関わりで捉え、道德的価値に関して考えたことや感じたことを統合させ、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見つけたりすることができるような工夫が必要であることをお話しいただいた。

また、「対話的な学び」の視点からは、子ども同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手がかりに考えたり、自分と異なる意見と向かい合い議論することを通じ、自分自身の道德的価値を深めたり広げたりすることが求められることを教えていただいた。

そして、「深い学び」の視点からは、道德的価値の理解をもとに、自己を見つめ、物事を多角的・多面的に考え、自己の生き方について考える学習を通して、様々な状況において道德的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践できるような資質・能力を育成することが必要であるとの示唆をいただいた。

これらの視点をもとに、部会員で小中合同の授業研究会に向けて指導案の検討を行った。

② 小中合同の授業研究会実施

本部会では、小学校と隔年で研究授業を担当し、互いに意見を交換しながら協議を深めている。今年度は中学校の授業として、御船町立御船中学校の岩野靖教諭に「中学生の道德1

自分を見つめる」(廣濟堂あかつき)の中から「銀色のシャープペンシル」(内容項目Dー(22)良心のめざめ)を資料として研究授業を実施した。

授業では、人間が内に弱さや醜さを持つと同時に、強さや気高さも併せ持つことに気付き、自分自身も弱さを強さに、醜さを気高さに変えることができる自己肯定感を育成することをねらいとした。そのための工夫点として、事前アンケートで生徒の実態を把握し、ねらいを明確にすること、主発問について、生徒の意見や体験を紹介し合うことで、考え議論する道徳への転換を模索すること、考えを深め共有するために、ペアで振り返り、話す活動を入れることで友達の考えを自分自身にも生かすことなどを取り入れた授業が展開された。

また、授業研究会では、小学校の会員から授業展開や活動について、様々な視点からの意見が出され、活発に議論を進めることができた。

③ 各学校の道徳教育実践状況の報告

本年度の研究テーマを受け、各学校から今年度の授業の取組や活動についてまとめを報告した。部会員からは、平成31年度から実施される「特別の教科道徳」について、具体的な準備や授業の進め方、評価などについての意見も出て、活発な協議が展開された。

(2) 成果と課題

成果

- ・ 夏季研修会では、熊本市立白川中学校の桃崎剛寿校長から、「考え議論する道徳教育」について解説していただいた。併せて、「主体的・対話的で深い学び」と道徳の関連についても詳しくお話しいただき、部会員の認識を深めることができた。

また、平成31年度からの中学校の特別の教科道徳の完全実施に向けて、授業が具体的にどのように変わるのか、どのような準備をすればよいのか、評価はどのようにするのかなど、部会員が疑問に思っていることにも丁寧に答えていただいた。

- ・ 小・中合同の授業研究会では、事前研修会に小学校の会員も参加し、貴重な意見交換ができた。研究授業では、心情の読み取りに終始する道徳から脱却を図り、考え議論する道徳に近付くことを目指した授業づくりを行うことができた。また、それぞれの校種の視点から協議を重ね、小学校の状況なども聞かせてもらうことで、子どもの発達段階を考慮した授業づくりの参考となった。

課題

- ・ 授業研究会では、様々な意見が寄せられ授業の改善点が見えてきた。しかし、改善点を集約して部会員で共有するところまで至っておらず、今後、部会で資料の蓄積や共有を図っていくことが課題である。
- ・ 平成31年度からの中学校の特別の教科道徳の完全実施に向けて、各学校の取組を共有しながら対応していくことが求められる。

4 実践事例

(1) 授業の概要

資料名「銀色のシャープペンシル」(「中学道徳1 自分を見つめる」廣濟堂あかつき)を用いて、「内容項目Dー(22)よりよく生きる喜び」を扱った研究授業を御船中学校の第1学年で実施した。指導案を次項に示す。小・中学校の部会員からは以下のような意見が寄せられた。

- ・ 行く、行かないでの思考ツールが考えやすかった。「納得できる」「納得できない」など考えやすかった。
- ・ 班での意見をもう少し他の班で共有できるとよかったのではないかな。意見を終末でどのように使用するかを考えられたらと思う。
- ・ 「自分のため」といった生徒は、「自分を高めたい」という考えをもっていたかもしれないので、そこで議論をするともっとよかった。



授業の様子

第1学年1組 道徳学習指導案

平成29年11月30日(木) 第5校時
指導者 教諭 岩野 靖 1年1組教室

- 1 主題名「良心のめざめ」 内容項目D-22 よりよく生きる喜び
資料名「銀色のシャープペンシル」(「中学道徳1 自分を見つめる」廣済堂あかつき)

2 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値について

人間は誰もが完全ではなく、弱さをもった生き物である。そのため、ときとして様々な誘惑に負けてしまうこともあるが、悩み、苦しみ、良心の責めと戦いながら、呵責に耐えきれない自分を深く意識するようになる。こうした苦しみ打ち勝って、自分に誇りをもつことができたとき、人間として生きる喜びに気付くことができる。

中学校の段階では、人間が内に弱さや醜さをもつと同時に、強さや気高さを併せもつことを理解することができるようになってくる。その気高さは弱さや醜さと決して離れているわけではなく、言わば表裏の関係である。生徒が弱さを強さに、醜さを気高さに変えられるという自信をもち自己肯定でき、よりよく生きる喜びを見いだせるようにすることが求められる。

(2) 生徒観(男子18名、女子14名、計32名)

本主題や道徳の授業に関する事前調査の結果は以下の通りである。

	質問内容	ある	ない
1	あなたは自分自身に弱さやずるさなどがあると思いますか。	28	4
2	弱さやずるさを持っている自分についてどう思いますか。 ア 変えていきたい。(22人) ウ 別にそのままでいい。(4人) イ このままじゃいけないけど、なかなか変えられないと悩むことがある。(6人)		
3	弱さやずるさを克服することについて ア 克服しようと行動できる。(6人) イ 克服したいけど行動できていない。(26人)		
4	自分自身の弱さやずるさについて具体的なエピソード ・教室の窓のカギを壊してしまった。黙っていようか言うべきか悩んだ。 ? 言うべきだと思い、先生に言いに行った。言いに行つてよかったと思った。安心した。 ・見て見ぬふりをしてしまうことがある。 ? 道におちている誰かの物やゴミなどを拾った。今の自分より1歩前に進めたかなと思った。 ・自分自身の弱さやずるさを克服したいけど、どんな行動をするべきなのかが分からない。		

自分には弱さやずるさがあると思っている生徒が多く、弱さやずるさをもっている自分を変えたいと思う生徒も多いが、実際に行動できる生徒は少ない。このことから、弱さやずるさに向き合うことについて深く考えている生徒は少ないと考えられる。

また、自分の弱さやずるさを十分に認識できていない生徒や弱さを自覚しつつも乗り越えようとしない生徒、自分の弱さと十分に向き合えていない生徒もいる。

(3) 指導観

生徒の実態から、人は誰にでも弱さやずるさがあることを正面から受け止めることが必要である。まずは事前アンケートや生徒の実体験を活用し、人は誰でも弱さやずるさをもっていることを認め合うことをスタートとする。

弱さどう向き合うかを課題意識としてもった上で、主人公の置かれた状況に対して自分の判断や行動の結果を考えさせる。生徒自身の経験や本音を交流させる中で、弱さやずるさと向き合うことについて多面的・多角的に考えを深められるようにする。

3 本時

(1) 本時のねらい

主人公の置かれた状況に対して、自分だったらどうするかを考えさせることを通して、自分の弱さや
ずるさを受け止めた上で、それを乗り越えようとする考え方や生き方に素晴らしさがあることに気付か
せ、自分も含め誰にでもその良さがあることを認めようとする心情を高める。

(2) 本時の展開

学習活動(分)	発問・説明・指示	UD・指導の工夫
1 事前アンケートの結果をもとに、自分自身の弱さやずるさについて考える。	「みんなのアンケート結果からどんなことが分かりますか。」	【視覚化】 ・グラフを用いて、内容項目に対する生徒の実態を視覚的に表す。
T Q 自分の弱さやずるさを克服するにはどうすればいいか？		
2 資料を読む。	「主人公のことをどう思いましたか。」	【焦点化】 ・主人公の弱さについておさえ、主人公が卓也の家に向かう行動に着目させる。
3 感想を出し合う。		
4 自分が主人公だったら、どんな行動をするかを考える。		
	【主発問】 「卓也からの電話をもらった後、あなたが主人公だったらどうしますか。」	【焦点化】 ・行くという行動の理由にも様々な価値が考えられるが生徒の意見や体験などを紹介し合うことで、弱さを克服しようとする行動の価値の高さに生徒自身が気付くようにする。
5 本時の学習を振り返る。	「今日の学習で考えたことや意見が変わったことなどをペアで話してみよう。」	【共有化】 ・ペアで振り返りを話す活動を行い、友達の考えを自分自身にも生かす。
6 本時に関わる生徒の体験談を聞く。		

【評価】(ワークシート、観察)

- ・人間は弱さと良心を合わせ持ち、弱さを受け止め、それを乗り越えようと行動する良さがあることを、自分自身の経験やこれからの生活と重ね合わせて考えようとしている。
- ・人間は弱さと良心を合わせ持ち、弱さを受け止め、それを乗り越えようと行動することの良さについて、意見交流の中で多面的・多角的に考えようとしている。